

新町地区城下町旧町名板の設置事業について はじめに

この計画は、熊本城築城400年にあわせ、魅力ある街並み形成を図るため、「城下町散策町図」(平成17年度)で紹介している新町地区を対象に、地域住民との協働で平成18～19年度に「旧町名板」の設置を行っている。また、この事業は、平成17年度に策定された「熊本駅都心間協働のまちづくり事業」の関連事業である。

旧町名板設置の経過と目的

1 経過

地元住民会議で一新まちづくりの会を中心に旧町名板設置推進委員会(以下、「推進委員会」)を設置し、そこでの会議を経て旧町名板のデザイン画等について決定した。

2 背景

(1) 新町の歴史

400年前当時の町割

新町は約100haの熊本城域の西側に位置し、熊本城から諸国へ通じる4つの街道の起点である「元標」のある、熊本城の玄関口にあたる町であった。また、町全体が堀と坪井川で囲まれ、四方を新一丁目門、新三丁目門、高麗門等の堅牢な櫓門で固められていた。

新町の町割は約120m×60mの南北に長い短冊形の街区で構成され、南北の通りは見通しが利かないように各所にクランクをつくり出している。また、その短冊形の街区の中は、間口が狭く奥行の深い敷地が並び、武家屋敷と町屋が配置されていた。そのような熊本城と共に城下町として創建された往時の町割は今もほぼそのままに残っている。

新町の変遷

新町は明治10年に起きた西南の役の激戦地であり、町の多くを戦災で焼失した。西南の役後、県会議事所、警察、区役所、熊本郵便役所などの主要施設が建てられ、卸・小売業、料亭、通りには朝市場なども立ち、熊本の中心として賑わった。明治24年鉄道の敷設によって町の西側の堀が埋め立てられ、昭和4年には市電の開通によって道路が拡幅され、一部町割の変化と共に電車通りが新町の主要な通りとなっていった。

昭和40年代に市場が田崎へ移転するに伴い、卸・小売業は減少し、加えて製造業事業所も移転が目立つようになった。

近年、そのような事業所跡地にマンションが建ち、人口減少には歯止めがかかるが、街並みは大きく変化してきた。

現在は、吉田松花堂、正妙寺通りなどが当時の姿を留めており、歴史を感じさせると共に、町のシンボルとして地域の人々に親しまれているが、その一方では間口の狭い建物を取り壊した跡の小規模コインパーキングが目立ち、街並みが途切れる印象は否めない。

(2) 町名の変遷

昭和40年、新町は1丁目～4丁目の4区分による住居表示となった。それまでは時代によって多少の変化はあるものの呼称である電信町を含め、概ね24町に区分されていた。

旧町名は、通りを中心に名前がつけられており、江戸時代にその町に住んだ職人やシンボリックな建物に由来するもの、蔚山町や高麗門町といった朝鮮との関係を明示するものなど、歴史に培われた文化と伝統を有している。

また、場所の特定がしやすく便利であり、長い間地域の人々に慣れ親しまれてきたことから、旧町名が失われることを惜しむ声があがり、一新まちづくりの会を中心にその保存と継承活動がこれまで続けられてきた。

(3) まちづくりの現状

街並みとそこに住む人が変化していく中で、平成元年に一新まちづくりの会が発足し、地域を一つにする活動が進められて来た。「まちを知ることが、まちへの愛着を育て、まちづくりにつながる」という考えから、地蔵祭の復活をはじめ、歴史勉強会、旧町名の保存・継承などに地域ぐるみで取り組み、平成17年11月27日(日)には熊本城築城400年祭開幕400日前イベントとして城下町歴史廻廊「新町を歩く」を開催、約150名が参加した。

平成18年4月には、旧町名にある韓国の蔚山広域市との交流事業も始まり、ハンゲル講座を開催するなど今後の発展に力を入れている。

現在は「まちづくり」、「観光」に続いて、「環境」、「福祉」の4つのテーマを掲げて取り組んでいる。

また、平成23年の新幹線の開通に向け、魅力あるまちづくりを目的とした熊本市との「熊本駅都心間協働のまちづくり事業」については、古町地区の五福校区、慶徳校区と連携した取り組みを進めている。

3 目的

この旧町名板は、以下の3点を目的としてデザインを作成し、設置するものである。

街並みや歴史を感じさせる。

まちの中に「まちの色」や「旧町名」を表出することで城下町「新町」を意識させる。

まち案内促進

熊本城築城 400 年に向け、歴史勉強会の成果を活かしたまちの紹介を行う。

暮らしに活かす

子どもたちや新住民がまちを知る機会づくりや位置を教える場合の指標とする。

旧町名板のデザイン

1 旧町名板の構成

旧町名の表示 町名の由来 ハングル文字併記 地の色
目を引きつける色 地図 以上、6つの要素で構成する。

2 構成要素毎のデザイン

旧町名の表示

- ・サインの中でも最も核になる要素とする。
- ・表記は「旧・ 町」形式の旧町名のみ絞ることで明確化する。
- ・地図中に現町名（丁目）の境界と現在地を表示し、現町名の読み取りができるようにする。

町名の由来

- ・60文字程度に限定し、読み取りやすさとレイアウトのバランスを向上させる。
- ・各町住民側から提案を受けるので、自分たちで作る公共サインの実現を目指す。

ハングル文字の併記

- ・蔚山町、高麗門町などの韓国に由来する地名も残っており、歴史上韓国との関係は深く、今後も交流を発展させることに寄与すると思われる。
- ・町名説明では日本語文と上下に併記し、比べ読みが可能となるので、地域住民のハングルへの関心を高めることができる。

地の色

- ・白色を使用する。
- ・熊本城の白漆喰のイメージと重なる。
- ・取付け場所の周辺色から切り離し「目を引きつける色」を生かす。
- ・色を全面で押し出さず、周辺環境に考慮したデザインとなる。

目を引きつける色

- ・アイキャッチ色：新町色（茶色、伝統色名：小豆色＋モダン）
- ・茶色は、伝統を守り抜く職人の技や堅実さの「職」をイメージする。
- ・さらに、赤みを加えることにより、菓子や、小豆を連想し、かつての菓子職人の

町「食」もイメージできる。

- ・既存の新町シンボルマーク（黄色）とも調和の取れた配色が可能である。
- ・この色は、モダンさも表現でき、新しい町の伝統をこれからもつくり続けるという意味で『新町色』とする。

職と食と色『新町色』



C 65
M 90
Y 60
K 0

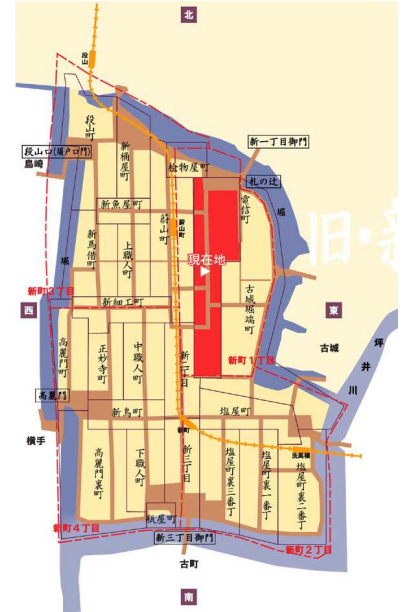


地図

- ・周辺地域の名称や核となる歴史資源の位置を配置し、観光客への説明用途だけでなく、地域住民の地元への関心の向上を図る。

例：熊本城、札の辻、四つの門跡の記入

- ・旧町名発足時の町割を生かした図を作成し、現在の所在把握の手がかりとして、市電の通り及び現町名（丁目）の境界を記入する。
- ・堀の色と坪井川の色は絵図にある藍色を基本に作成し区分する。
- ・通りは土の色を表現するために黄土色を基本とする。



3 文字のサイズと字体

サイズ

- ・「町名」8cm角を基準：20mからの視認性確保
- ・「説明文」2cm角を基準：5mからの視認性確保

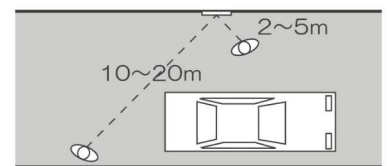
字体

- ・「町名(楷書体)」：歴史を感じる書体
- ・「現町名・町名説明文(ゴシック体)」：歴史的に区分するために現在のものに使用。説明文は小さくても読みやすくなるようにゴシック体とする。

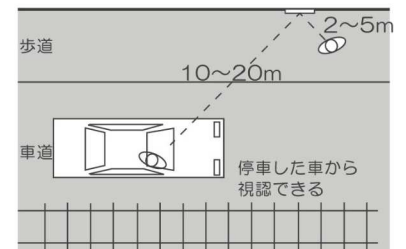
□視認距離別文字高のめやす

視認距離	図記号の基準寸法	和文字高	英文字高
遠距離 (30m)	360mm以上	120mm以上	90mm以上
中距離 (20m)	240mm以上	80mm以上	60mm以上
近距離 (10m)	120mm以上	40mm以上	30mm以上
近距離 (5m)	60mm以上	20mm以上	15mm以上
至近距離 (1~2m)	35mm以上	10mm以上	7mm以上

(UDデータブック(熊本県)参考)



新町の通りの路地に設置する場合



電車通り等の歩道際に設置する場合

4 全体統合したデザイン

- ・新町色(小豆)の帯と旧町名がまず目に入る大きさ、配置とする。
- ・地図は通りを中心とした「旧町名区分」が判りやすく、絵図のような歴史を感じさせる色調とする。
- ・熊本城を視覚的に判りやすくするためにイラストを配す。

